



死について・
寒山詩を読む



小林 道憲

死について・寒山詩を読む——随想（2）目次

死について—————	1
寒山詩を読む—————	8

死について

十八世紀末のパリの墓地整理のため姿を消したサン・イノサン墓地は、教会広場と納骨堂からなる墓地で、パリの住人たちが幾世紀にもわたって埋葬された聖地であった。誰もがここで永遠の眠りに就きたいと願っていたから、遺体を新しく埋葬する空間を作るために、以前に埋葬した死者の骨を地中から取り出して、それを回廊のアーチの上に積み重ねた。その納骨棚の下には、骸骨が踊りながら皆を引き立てていく有名な「死の舞踏」の絵が描かれていた。「死の舞踏」の絵は、このサン・イノサン墓地が発祥の地になって、十四世紀末から十五世紀、ヨーロッパ中に広がった。そこには、教皇、司教、皇帝、貴族、騎士、代官、修道士、教師、商人、農夫、医者など、あらゆる身分の人々を、若者、乙女、老人、子供も含めて、その分身である骸骨が踊りながら死の世界に誘っていく様子が描かれている。身分の高い者も低い者も、貧者も富者も、男も女も、善

人も悪人も、誰もが死を免れず、平等に死地に赴く運命にあることが、身の毛もよだつような図で表現されている。

十四世紀半ば以降のヨーロッパでは、恐ろしいペストが何度も流行し、何百万もの人の命を奪い去っていった。その他、飢饉や戦さ、天災などによって、次々と人々が死んでいった時代、それが中世末期という時代であった。それは、生の儂さ、明日の不確かさ、この世の富や地位や美の空しさを告げて余りあった。死はいつ襲いかかるか分からない。「メメント・モリ」（死を想え）という警告が響き渡っていた時代だったのである。「己の日を数えよ」「若き時より汝の墓を想え」というような教えが盛んに説かれていたのは、そのためである。死への思いが人々の心に重くのしかかっていたのである。実際、人々は死と隣り合わせで生きており、子供でさえ身近に人間の死を見ていた。人々は常に死を見つめ、むしろ死に親しかった。中世という時代は、東西を問わず、そのような時代であった。

確かに、現代も、必ずしも死を忘れたわけではない。現代人も、相次ぐ事故や災害、病気など、死に触れる機会がないわけではないし、死は結構日常話題になってもいる。特に、人工生命維持装置の発達に伴って、病院で極限まで延命治療を受けながら孤独な死を迎えることが増えたために、そのような単なる生命を限りなく延ばすことに価値があるのかが問われてきている。そのため、逆に、死の意味を考えねばならないことに、現代人は直面した。これは、現代特有の問題であろう。病室で、家族から遠ざけられて、人工呼吸器やいろいろなチューブをつけられ、無理に生き長らえさせられてい

る状態に、果たして人間としての尊厳があるのかどうか。それは、単なる延命という名の苦痛の引き延ばしではないか。

あまりにも延命技術が発達しすぎたために、われわれは、死の恐怖よりも、医療技術によって生かされてしまう恐怖を感じている。不老不死を求めた昔の仙人道にも似て、生命をできるだけ延ばすことに価値を見出している現代医療のもと、われわれは死ねない苦しみを味わいながら生きねばならない。しかも、人間の生死が、その医療を止めるか止めないかによって決められることになってしまった。死は、自然に迎えられるものではなく、すでに医療機器の管理下に置かれているのである。まるで工場の中で生かされ死んでいくようなレディ・メイドな死に意味があるのか。死との戦いだけが医療の至上の使命なのであろうか。もしもそうだとすれば、なお、現代は、〈単に生きる〉ことを崇拜し、死を直視することから目を逸らそうとしていると言わねばならない。

死は経験できない。特に自己自身の死は経験することができない。自己の死は、人生で一回きりだからである。しかし、死を、考えることはできる。病や老いから、死を想像することはできる。また、多くの他者の死を経験し、自分の死の確実性や不可避性について自覚することはできる。人間は〈死すべきもの〉として生まれる。死は確実に訪れ、すべてを無にする。そこから、この世から消え去ってしまうことへの不安が生じる。

人は生まれて、生きて、そして死ぬ。死はいつ来るか知れない。背後の磯に潮が満ちてくるように、死は後ろから迫ってくる。人生

は急ぎ過ぎゆき、そして終わる。人の行き着くところは死である。朝になれば消えていく葉先の露のように、生あるものは儚く消えていく。この身は、一夜を明かす旅寝の床のように、仮初めのもの、陽炎や夢のようなものといわれてきて久しい。人間存在は、死を前にして無力である。

しかも、人生は苦しいことの方が多い。生まれたものは病や老いに悩み、憂いや惑い、悲しみや苦悩から逃れられない。憎しみに会い、求めて得られず、愛するものと別れねばならない苦痛は、生につきまとう。そればかりか、多くの場合、苦痛なしには命を失っていくことができない。

人生は、死という同じ一つの出口だけがある数多くの迷路である。盆中の虫のように、同じところをぐるぐる回っている迷路のような人生に、どれほどの意味があるのであろうか。死を前にしては、この世で得られた権力や名誉も、水の上に書かれた文字のように空しい。死は生を無意味化する。避けられぬ死のことを考えると、人生の意味が問われてくる。

死は、すべてのものの絶対否定である。死によって諸行は跡形もなく消え失せ、停止する。死は、人間存在の根底に潜む空無性を浮かび上がらせる。諸関係の偶然の結合から生は生じ、それはいと速やかに離散する。その離散が死である。諸関係の結合によって自己は作られるが、自己は実体ではなく、死によって消滅する。個性とか同一性も幻のようなものであり、死によって失われる。死の世界は、時間空間を越えた無底であり、そこには美醜もなければ、善

悪もない。しかし、この寒暑なき闇こそ、一切の苦や憂いの消え失せるところであろう。死は、すべての苦悩からの解放であり、そこでは、この世の罪も消滅する。死の世界は、苦も楽もない永遠の静寂の世界である。

生きているということは、諸要素の結合によって生きていることであり、死ぬということは、それらの分散である。物質とエネルギーの偶然の結合によってわれわれは生まれ来たり、その分散によって滅す。とすれば、諸要素の結合によって生じた業苦や煩惱も、その分散によって消滅するであろう。死は、一種の救いなのである。

死は眠りに近い。死は、夢のない永遠の熟睡なのである。死は永遠の休息であり、平安である。ならば、死は望むべきもの、喜ばしきものだと言わねばならない。「死ぬる日は生まるる日に^ま愈る」と言われるように、命あるものに死があるのは幸いである。すべてを解決してくれるもの、それが死であり、死は慰めである。死は、この世の醜悪なもの、重荷からの解放であり、この世の煩悶から解き放ってくれる。死の世界には、怒りも恥も迷いもない。死は、苦しみに満ちた現世からの唯一の脱出口であり、避難所なのである。

なるほど、人は死を恐れる。特に死に至る苦痛を恐れる。しかし、死に至る苦痛は生の苦痛であって、死ではない。死そのものは苦ではなく、むしろ苦からの解放である。死は恐るべきものではない。むしろ、死なないことの方を恐るべきであろう。病苦や老醜のうちにいつまでも生きていなければならないとしたら、それは不幸である。死なないことは呪いなのだ。

人はどこからきてどこへ去るのか。人生が短くほんのひと時だとすれば、われわれの世界は、ほとんど死者の国に囲まれている。生の底には死がある。しかし、そこからまた、あらゆるものが生まれてもくる。生は、死の海にしばし現われた渦のようなものである。死は生から生じ、生は死から生じる。死がなければ、生はない。生死は裏腹、表裏である。

生物学的にみても、生命に死が生じたのは、生物が有性生殖を発明して以来のことであるが、しかし、生体を構成している細胞に注目すれば、そこでは細胞が絶えず死と再生を繰り返し、生体を維持している。細胞には、おのれの状況を判断して死を自ら引き受け、新しい細胞に席を譲る能力が備わっている。細胞の自死によって、生命は形作られている。生を更新するには、細胞の死が必要なのである。死なくして生はない。生命個体の場合も同様に、種の存続のためには個体の死が必要である。その種にも絶滅ということがあり、その絶滅によって新しい種が誕生する。この地球や宇宙も、またそうなのである。生命科学者の言うところによれば、自分に与えられた機能を果たし死んでいく細胞を顕微鏡で見ていると、宇宙の中の星の生成と終焉を見ているような気持ちになるという。

生きとし生けるものの死は、宇宙への帰還なのである。人間も、死を通して、宇宙へ回帰する。人間の一生は、宇宙の時の流れの中ではほんの一瞬にすぎないが、その一瞬を生きて、宇宙という大海に帰っていく。人間を超える大いなるものへの帰還、それが死である。人間は、そこから生まれ、そこへと死す。それは、生の終着点

であると同時に、生の源でもある。宇宙は、銀河をつくり、星をつくり、惑星をつくり、生命を生み出してきた。その生命も、惑星も、星も、銀河も、また宇宙に帰っていく。そして、宇宙そのものも死と再生を繰り返して、常に更新されるのであろう。

われわれは、大宇宙に生かされ、生き、そこへと帰る。われわれの死は、われわれが大自然の中の働きであることを教えている。人間を含む生き物が、誕生し、成長し、老化し、死ぬこと、それらすべてを、大自然の中の働きとして受け入れねばならない。大海に現われた波の一つのように、私は、生きたことによってわずかの痕跡を残し、もう一度宇宙の大海に回帰する。生ばかりでなく、死もまた、永遠な生命の活動の姿である。生は死であり、死は生であり、生と死は一つである。生をよしとするなら、死もよしとしなければならない。わずかな時間しか生きることのできない死すべき命も、無限の宇宙につらなっている。死は終わりではなく、一つの過程なのである。

昔から、哲学は〈死を学ぶこと〉だと言われてきた。死を見つめ、死を自覚することによって、世界と世界に存在するすべてのものは驚きと化す。そのとき、物事の本質はよく見えてくる。物事をその消滅点から見ることができるからである。われわれは、自己自身の奥底に死があることを知って、はじめて真にもものを見ることができるようである。闇の中から光をとらえた方がよりはっきりと見えるように、死から生をとらえた方がかえって生が見えてくる。哲学は、生きているうちから死に身を置いて見ることなのである。生よりも

死に近いところから物事をとらえるべきであるということが、哲学は死の練習だということの意味だったのであろう。「メメント・モリ」という中世以来の教えは、また、深い意味をもっていたのだと言わねばならない。

寒山詩を読む

森鷗外に、「寒山拾得」という短篇がある。

唐の貞観の頃、台州の主簿・閻丘胤の頭痛をまじないによって治した乞食坊主がいた。それは、天台山・国清寺に住む豊干トウカンという僧であった。豊干の言うところによれば、国清寺から少し離れた石窟に寒山という者が住んでいて、国清寺の台所で食器洗いをしていた拾得のところへ残飯をもらいに来る。しかし、実は、寒山は文殊の化身、拾得は普賢の化身だという。そこで、閻丘は国清寺を訪ね、二人を礼拝した。すると、二人は顔を合わせて、腹の底からこみ上げて来るような笑い声を出したかと思うと、「豊干が喋ったな」と言っ

て、厨を駆け出して逃げて行ったという。この短編は、大体、寒山詩集の閻丘胤の序に基づくもので、伝説化されていて、ほとんど事実を伝えるものではない。この閻丘胤が、寒山と拾得の詩を集めて一篇としたというのだが、それも擬作であろう。何より、鷗外も疑っているように、そのような高級官僚が唐

時代にいたかどうかとも定かでない。

これまでの考証によれば、寒山は、中唐以降のおそらく名も無き居士だったのであろうと思われる。その遺した詩は、自伝的なもの、世相や僧侶の批判、道教批判、教訓詩、そして、山林幽隱の興を歌ったものなど、多種多様である。

「生れて従り是れ農夫なり」と言っているから、寒山は、もと農民だったのであろう。ところが、他人から非難を被ったのと、あまつさえ自分の妻に逃げられてしまったために、世俗の煩わしさを断ち切って旅に出、仕官の道を探したようである。

寒山詩の中で『文選』の文章を自在に駆使し、「書を読み兼ねて史を詠ず」と言っているところをみれば、作者は、相当な知識人であり、教養人であったことがわかる。おそらく寒山も、科挙の試験を受けて官途に就こうとしたのであろうが、例に漏れず失敗しているのであろう。特に、安史の乱以後の世相は混乱していたから、結局、挫折、諦めの道しか残っていなかった。そのこともあって、寒山詩には不遇な知識人に対する同情や書生の貧困を嘆く詩がある。

吁嗟貧復病	吁嗟	貧にして復た病む	
爲人絶友親	人と為り	友親を絶す	
甕裏長無飯	甕裏	長に飯無く	(甕裏 甕の中)
甌中屢生塵	甌中	屢々塵を生ず	(甌中 甌の中)
蓬菴不免雨	蓬菴	雨を免かれず	
漏榻劣容身	漏榻	劣かに身を容る	(漏榻 雨漏りするベッド)

莫怪今顛顛 怪しむ莫れ 今ま顛顛することを
多愁定損人 愁い多ければ定らず人を損ず

また、優れた才能を持ちながら世に容れられず、孤独のうちに暮らす知識人の姿を、悲痛なばかりに歌う。そこには、寒山自身が反映していると見ることができる。

極目兮長望 目を極めて長望すれば
白雲四茫茫 白雲は四方に茫茫たり
鴟鴞飽臙臙 鴟鴞は飽いて臙臙 (鴟鴞 梟)
鸞鳳飢傍徨 鸞鳳は飢えて彷徨 (鸞鳳 鳳凰)
駿馬放石磧 駿馬は石磧に放たれ (石磧 砂漠)
蹇驢能至堂 蹇驢は能く堂に至る (蹇驢 びっこの驢馬)
天高不可問 天高くして問う可からず
鷓鴣在滄浪 鷓鴣 滄浪に在り (鷓鴣 みそさざい)

梟は腹を膨らせてゆったりしているのに、鳳凰は腹を減らして彷徨っている。駿馬は砂漠に追放され、びっこの驢馬は座敷に通される。なぜか、しかし、天に問いただすこともできないと言うのである。

「焉くんぞ知らん 松樹の下、膝を抱きて冷聽聽たらんとは」と詩の中で語っているところをみれば、寒山は、流落を嘆く愁いの人でもあった。

かくて、寒山子は、すべてを捨てて国清寺近くの寒巖に隠棲した。もと何らかの形で国清寺にいたこともあるらしいが、二十年ぶりに帰ってきたという。もつとも、時々山を下りて民衆説教もしたようであるが、「寒山は痴人なり、風顛なり」と言われ、皆に笑われたという。寒山という人は、僧でもなく俗でもなく、時代からの脱落者、アウトサイダーだったのである。

それ故にまた、寒山詩には、当時の知識人や出家、俗人を鋭く批判する詩が多数残されている。卑俗な歌を唱して愚者の賞賛を得る輩。諸芸に優れてはいるが、心中に慙愧なく、真理の消息に通じていない知識人。仏法について何の知見もないのに、俗人をたぶらかしてこれが道だと悟りすましている出家。難しい学問に浮身をやつし経典のことはよく談ずるが、戒を破り律文に違いながら仏法の第一人者を気取る無信の僧など。それらが痛烈に批判されている。寒山は、必ずしも枯れきった隠遁者ではなく、多感な一面を持った時代の批判者でもあった。

それだけに、世の中の人々の生きようのよく見えていた人でもあった。われわれは、あたかも盆中の虫にも似て、塵蒙^{じんもう}にまみれて同じところをぐるぐる回っている。苦楽が交々に身に迫ってきて果てしもない。生死去来を繰り返し、六道三途、無明の世界を追いかけている。しかも、人生は百にも満たないのに、人は常に千歳の憂いを懐^{いだ}く。

時の流れは矢のように速く、人の生涯は、浮き草のように長しえに漂うて、飛蓬のように息うことがない。桃花も、その花の盛りを

夏まで持ち越そうと思っても、風月は待たない。朝朝花は遷り落ち、
歳歳人は移り改まる。人生は儚く、美は無常である。

誰家長不死	誰が家か長えに死ならざらん
死事舊來均	死の事 旧來均し
始憶八尺漢	始め八尺の漢と憶いしに
俄成一聚塵	俄かに一聚の塵と成る
黄泉無曉日	黄泉 曉日なし
青草有時春	青草 時有りてか春
行到傷心處	行きて傷心の処に到らば
松風愁殺人	松風 人を愁殺す

永劫の時は流れ去る川にも似ている。浮生の幻は、灯火の燃えさ
しのようにでもある。早朝に滴り落ちた露もすぐに消えてしまう。人
もすぐに年老い、瞬く間に丘の辺の墓の中に納まる定めから逃れら
れない。このような人間の生きようを、寒山は、峻巖な山腹から凝
視していたのである。

その寒山が隠棲した天台山は、たたなわる峰々が重なり、連なる
谷々を道は幾曲がりもして、車馬の轍の跡もない。雲は、緑なす深
淵の水に洗われるかのようなのである。春ともなれば、自然の佇まいは
新鮮に甦り、秋ともなれば、松は風とともに歌を歌っている。この
ような大自然の中で、寒山は、世の塵累に煩わされず、すべてをう
ち捨てて、秋江の水のように春秋を過ごしていた。白雲を友とし、

任運自在に、天地を改変に任して幽居を楽しんでいたのである。しかし、この幽居の背景には、深い落魄と憂愁の情があったことは忘れることができない。

寒山唯白雲	寒山は唯だ白雲のみ
寂寂絶埃塵	寂寂として埃塵を絶す
草座山家有	草座 山家に有り
孤燈明月輪	孤燈 月輪明らかなり
石牀臨碧沼	石床 碧沼に臨み
虎鹿毎爲鄰	虎鹿 毎に隣を爲す
自羨幽居樂	自ら幽居の楽しみを羨い
長爲象外人	長えに象外の人爲らん

人の生は幻のごとく空である。空を觀ずれば、世界はますます静寂となる。このような澄みきった境地を、人跡を断った寒山という地上の理想郷として、寒山詩は象徴的に描写している。

古来、中国でも日本でも、寒山拾得は、水墨画の格好の画題になってきた。ただ、そこでは、大笑する蓬髮破衣の寒山拾得の姿が描かれることが多かった。そのため、寒山拾得は、不思議な奇矯さをもった変わり者という印象が植え付けられてきた。中国宋元時代の梁楷、牧谿、因陀羅の描く寒山像もそうだし、わが国の南北朝から室町にかけての明兆、靈彩、松谿もそうである。それらは、ほとんどみな、寒山詩集の冒頭につけられた閻丘胤の序の影響のもとにあ

る。

ただ、比較的寒山の実像を伝えていると思われるのが、わが国の南北朝前半の画僧、可翁の描いたいくつかの寒山図である。後ろに大きなふところを垂らしながら手を組み虚空を見つめている寒山像、下界をじっと見据えている寒山像、古詩を喃喃と読んでいる寒山像などである。それらは、確かに、寒山詩の内容をよく伝えている。